



インドネシア・サツマイモ物語(1)

インドネシアJICA専門家 坂 本 敏

成田空港を昼前に出発した飛行機は夕方にジャカルタのスカルノ・ハッタ国際空港に到着する。約7時間の飛行であるが、2時間の時差があり、時計は2時間逆戻りするため、比較的早く感じる。

私は一昨年（平成9年）8月、植物遺伝資源の技術協力のために、JICA（国際協力事業団）から、インドネシア農業省農業研究開発庁へ派遣された。所管する作物は稲、トウモロコシ、その他の穀類、大豆などの豆類、いも類、園芸作物、工芸作物などすべての作物である。しかし、やはり関心のあるのは、いも類、特にサツマイモである。そこで、インドネシアのサツマイモのあれこれについて、肩のこらないご紹介をしてみたいと思っている。

◎ 日本とインドネシアのいも類

日本とインドネシアのいも類には、浅からぬ縁がある。

日本でバレイショはジャガイモと呼ばれるが、このジャガイモまたはジャガタライモと言う名前は、実はインドネシアの首都ジャカルタの名称に由来している。日本にジャガイモが初めて伝わったのは、1598年（慶長3年）にオランダ船によってジャワのジャカルタから、長崎港にきたものと言われている。

また、太平洋戦争中に日本軍がインドネシアに進攻していた頃、私が今勤務している研究所は、日本軍の軍政部技監が食糧増産のた

めの戦略を練った所と聞いている。ここには、1943年（昭和18年）から終戦の1945年（昭和20年）まで、主として^{こうす}鴻巣の農事試験場から数名の研究者がジャワ島の食糧増産の立案、指導のために軍政部技監として派遣されていた。インドネシアの研究120年誌によると、当時の試験場は“中央農事試験場”と呼ばれ、作物関係の部門は“栽培技術部”といわれていたことが記載されている。当時の食糧増産の主体は主食の米であったが、畑作物も重要であり、検討されたのはトウモロコシ、サツマイモ、ソバなどであった。

インドネシアではサツマイモよりキャッサバが好まれるが、当時は栽培が容易で早く収穫できることから、サツマイモが普及の対象になったようである。

当時の試験について、田杉平司氏は「ジャワ農業の思い出」に次のように記載している。（以下原文一部引用）（『 』内は引用を示す）

『当時農試でいろいろのサツマイモの品種を比較栽培したが、心覚えの品種をあげると—Serdang, Net, Southern Queen, Tanberkoer, Summer big yellow；育成系統にT-1, T-3などがあった。』

Netは収量が最も多く、T-3, Serdangはなかなか優良種で味も良かった。黄肉、粘質種でインドネシア人の好むものにPort Rico, Tandjonkaitがあった。また、収量は少ないが肉色が紫で、すこぶる美味なのにLilin、

▼ボゴールの中央食用作物研究所



約2ヶ月で収穫できるごく早生なのにSoeboelan（Soeは1、boelanは月で、1ヶ月で収穫できるという意味）（筆者注：現在はSebulanと書きスプラントと読む）があった。』

インドネシアでのサツマイモの栽培法については、別の機会に紹介するが、一般に熱帯では温帯地方のように苗床を作らず、収穫直前または直後の蔓を切って次の苗に使うことが普通である。また、畦立もしないし、肥料もやらないことが多い。従って、収量はha当たり5～6 tで極めて低収であった。それを日本流に畦立し、船底植えすることを奨励した結果、農試の試験では約15 t、ある地区では20 t以上の収量を挙げたところもあったと言われている。このような船底植の指導は直接農家はもとより、ジャワ各地から県長、郡長という、それまで畑などに入ったことのない人たち、あるいは技術者、さらにボゴール農学校の生徒などを農試に集めて玉利氏が直接講習し、実習を行ない、普及に努めたと言われている。その結果、当時はどこに行ってもサツマイモが見られ、船底植も相当行なわれたそうである。

◎ T.No. 3 との出会い

ここに名前が登場した玉利幸次郎氏が、これからお話しするT.No. 3の産みの親であり、

T.No. 3を日本に持ち帰られた方である。同氏は当時、ボゴールの農試に日本軍政部の畑作担当の技監として活躍されていた。

T.No.3との出会いについて玉利氏は次のように記載されている。

『T.No.3のTは多くの知人は玉利のT.と思いついて入っているが、然らず。T.はTimorのT.である。（筆者注：Timorという島があるが、恐らくtimur（東）のT.であろう）即ち、東ジャワのスラバヤ市の近くの高地の邦人が管理しておる農園の高橋某氏に同地方の甘藷の品種の事を尋ねたところ、同園の収納小屋に案内され優良系と思われる5種の藷を選び出して各々の特性の説明を聞いた。この5種の種藷を持ち帰り、ボゴール農試にT.の略号を付けて栽培試験を行ったところ、以前から農試に保存されていた他のものに比して総合的に一段と優れている事が判り、優良品種としてジャワ全島に普及を計ったのである。』

◎ T.No.3のジャワ島での普及

このようにして選抜されたT.No.3のジャワ島での普及について次のようなエピソードが伝えられている。

ある時、中部ジャワスマラン市で食糧増産会議があり、玉利氏も参加された。驚いたことは列車がスマラン州に入るや車窓の左右の諸畑に全部T.No.3が栽培されていることであつた。これ程の普及は、ボゴール州でも出来ていなかった。会議後の宴会の席で玉利氏はその事に賛辞を送り、あれ程の普及は並み大抵では出来ない事である、誰がやったのだと尋ねたところ、末席に同州の食糧増産普及員が数人いたが、その内の一人を指したので本人を呼んで、あれ程迄に普及したその方法を探ねたところ、彼は「私は何度も始末書を

とられました」との事で、何故の始末書かと聞くと、原種畑から挿穂を一度に多量運ぶ事の不可能な事を知り、軍隊の移動の時、休憩しておる間、そのトラックを用いたので、勿論悪いとは知っておりましたが、緊急食糧増産のため敢えてやりました、とのこと。実に思い切ったやり方で始末書等意に介しないといった様でしたが、一見おとなしい人物の様であった。その席上、直ちに玉利氏から岡出幸生ジャバ緊急食糧増産技術指導監とスマラン州長官に報告し、両長官から同君は、おほめの言葉と杯を戴き、面目を立てたと言われている。

◎ T.No.3の日本への持ち帰り

このようにジャワ島で普及したT.No.3の日本への持ち帰りにも玉利氏の並々ならぬご苦労があったことを知る人は余りいない。

同氏はジャバで普及を計りながら、この品種を何としても日本に送らねばならない。必ず日本で、この特性がそのまま発揮出来ないとしても、品種改良の親として役立つものとの確信を持っていたそうである。

終戦後に復員する時、どうしても日本に持ち帰らねばならぬ、と考えていた数多くの農作物の種子類は、玉利氏の荷物の一部として持ち歩いていた。ジャワからの復員はジャワ沖のガラシ島でしばらく自給生活を送った後、帰国させるとのことであったが、同氏らは指名されて早期に帰国されることになった。帰国にあたり、畑の藎を掘ってみたが、藎らしいものは出来ていないので、仕方なく蔓を持ち帰ることにした。無人島であっただけに容器等ないのは勿論である。無論水苔等はない。その頃は全員栄養失調になっており、その状態を見て時々米軍の野戦食が支給された。同

氏はその厚い包装紙を用いることにし、出来るだけ用心して、其の包装紙に僅かの土を入れ、それに4品種の蔓を各2本ずつ挿して持ち帰ることにした。そこで藎蔓の荷物には長い紐を付けてこれで昼夜を問わず宙に釣るし、鼠害を防ぐことを考えた。これがこの事を成功させたと思われる。船は古く、第一次世界大戦の時の輸送船で、太平洋戦争中、シンガポールの埠頭につながれ放しで、至近弾を受け、スクリューが傷められ機関も故障しているので、このまま航海すると大竹港迄22日程かかるが、何回か機関の故障のために漂流するだろう、しかし、食糧は30日分積んであるから、安心する様にと出港後船長から知らされて、不安の気が船一杯に満ちたそうである。一同着た身其儘、荷物としては一様に支給されたリックサック一個だけであったが、玉利氏には大切な生きた甘藎の蔓を挿した包みがあった。船室は勿論なく、皆蚕棚と呼んでいた正座出来ない高さの棚が幾層も造られ、その一部が玉利氏らに割当てられた。計ってみると一人の占める座席の巾は30cm強で、皆が横にならねば寝られぬ状態であった。しかし幸い同氏らの棚は比較的ハッチに近く、外気も入り易い処であった。誰言うとなく若い者は甲板に出て寝ると言い、若い者がそれに



▲インドネシアの道端で売られるサツマイモ

従ったので少しは楽になった。航海が始まると皆甲板に出て歩き回り、ますます栄養状態が悪くなるので、出来るだけ寝てエネルギーを失わない様にと注意して、年配の人は皆棚の上にいた。食事は一日二回、朝10時にビスケット4枚、夕食は午後3時に粥状の米飯が飯盒の中蓋に軽く一杯、それに航海中一回も変わらず、乾燥甘藍を油を加えて煮たものが添えてあっただけであった。それに飲料水は一日に湯呑茶碗3杯だけと言い渡された。一同それで我慢するより途はないが我慢出来ないのは大切な甘藷の挿穂である。一同水には全く困ったが、そのうえに甘藷の挿穂を生かして日本に持ち帰るため水を与えねばならぬ。このために水を要求しても理解してもらえない相手ではない。議論して不愉快な気分になるよりと一策を考えた。相手は我々ガラノ島組の同じ棚の仲間である。食糧飲料水で困っているのと同様無聊で困って居る。一切の書いた物はガラノ島に持って行く事は禁じられ、又取上げられており、話題も皆尽きている。話せば喉も乾くし睡眠は充分であるので、只おとなしく横になっているだけである。午前の配給のビスケットを如何に長く時間をかけて食べるかを考え、また仕事とて一切ない帰還船の事とて、故郷の土を踏む事を唯一の楽しみに一日一日を送ったそうである。案のじょう、三日目頃から機関に故障が出来て漂流が始まったが、何時直るか一切判らないし、又知らされない。昼間なら明るいので、まだ良いとして、夜間機械の音が変わだと思ふ内にその音が消えると只でさえ暗い電灯が消える。又何時直るか判らない。皆不安で眠れない。こんな事が一日に何回と繰返す様になった。初めの何日かは玉利氏自身の水を僅かずつ蔓に与

えたが、これでは自分自身水不足で健康を損う事も考えられ、それで案を出し周囲の人に話してみた。それは自分が持っている諸苗はこれからの日本にとってサツマイモの親となる大切な蔓であると、T.No.3の特性等を話し、あれで私自身が儲ける等そんなケチな気持ちで持って帰るのではない等、など話した。皆ガラノ島の生活で玉利氏の仕事等を知っているので多弁を要さなかった。その為にそれから毎日何か私が興味ある話をします。その話が終ったら聞いた人は数滴ずつでよいから、あの諸蔓を生かす為に水を私に下さいと言ったのである。皆無聊に苦しんでいる人達であるので、同氏の周囲に20人近くも円陣を作って集まった。同氏も出来るだけ皆の興味を引く様な話を毎日一時間程して、茶碗を回すとそれに一杯程の水が集った。この様にして与える水には不足はなくなった。昼間はハッチの下の方に釣り、夜間は出来るだけ上部に釣り上げ少しでも外気に当てる様注意した。その様にする為、1日に二回はハッチの上に渡してある鉄の梁の様なものにまたがり、その中間に吊るしてある蔓の包みを上げ下げしたのである。その注意のため大竹港に着くまで蔓の軟化は防げたのである。途中船の水が不足し、それを補う為マニラに寄港したが、沖

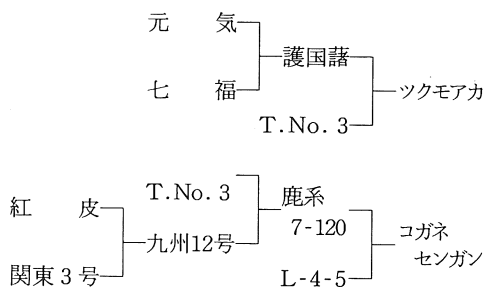


▲ボゴール周辺のサツマイモ畑

に三昼夜泊められ、やっと補給されて航海を始めたが、一日も早く母国に着き蔓の手入れをやらねばと念じていた。しかし、船の漂流は毎日の様にあり、瀬戸内海に入っても一回機関の故障から漂流した。こうして、やっと大竹港に入港したとのことである。

◎ T.No.3の利活用

このような苦勞をされて持ち帰られたT.No.3はその後、玉利氏が大阪市大植物園長として大阪に保存しておられた。一方、九州農試指宿試験地の当時の室長藤瀬一馬氏は、従来の交配母本が殆ど約10品種の在来品種に限られていたので、変異の幅を拡大するために、外国品種の血を導入する必要を感じておられた。そこで、玉利氏の外国品種の話を目にされると、早速、大阪の玉利氏を尋ね、T.No.3を含む3品種を入手された。このうち、特に期待されたT.No.3について特性を調査したのち、1952年（昭和27年）に交配親として用いられた。この年、指宿試験地で行ったT.No.3を親とした交配組み合わせの中から、中国農試でツクモアカ（農林28号）が護国藩×T.No.3の組み合わせから、九州農試で後にコガネセンガン（片親になった鹿系7-120がT.No.3×九州12号の組み合わせから選抜されており、T.No.3の能力が優れていたことを示している。



〔ツクモアカ、コガネセンガンの系統図〕

九州農試で選抜された鹿系7-120はその後、1958年（昭和33年）にアメリカ合衆国の多収品種L-4-5（品種名Pelican Processor）と指宿で交配され、この後代から1966年（昭和41年）にコガネセンガンが選抜された。コガネセンガンは当時のサツマイモの主要な用途であったでん粉原料として、九州全県のみならず関東、東海、中四国の多くの府県で奨励品種に採用され、一時は全国のサツマイモ栽培面積の第1位を占めたこともあった。また、コガネセンガンは食味が良いことから食用としても広く利用された。このように、優れた品種を生みだした交配母本として、玉利氏のインドネシアから持帰ったT.No.3の果たした役割は極めて大きいと思われる。

なお、玉利氏の資料入手については元指宿試験地勤務の湯之上忠氏にお手をわずらわした。厚く御礼申し上げます。

＜参考資料＞

1. 九州農業試験場（1972）かんしょの品種ならびに系統の特性、研究資料 第43号205p
2. ……（1997）指宿試験地のあゆみー甘しょ交配研究の五十年一、88p
3. Pusat Penelitian dan Pengembangan Tanaman Industri（1998）120 Tahun Penlitian Tanaman Industri, 129p
4. 玉利幸次郎（1977）甘藷T.No.3について、日本植物園協会誌 第11号：23-25
5. 田杉平司（1968）ジャワ農業の思い出(3)、アジア農業 6(10)：18-21

坂本敏様はインドネシアに於て農業技術協力の専門家としてご活躍中のところ、本年1月下旬心筋梗塞にて御他界（急逝）されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。